

家のはなし (海外の住宅事情) ～その 3～

ロンドンから転勤したプレトリアは、それまで経験したどの国の住居とも比較にならない豪邸ばかりという状況でした。その背景としては、当時の南アがアパルトヘイト撤廃と民主化によって黒人政権が誕生して数年が過ぎていたものの、依然として白人層と非白人層の貧富の格差と、それに伴う劣悪な治安状況が大きな社会問題として横たわっていたことにあります。首都プレトリアでは、白人層が居住する豪邸ぞろいの高級住宅街と貧困黒人層が居住する郊外のタウンシップがはっきりと線引きされていましたが、これこそが貧富の格差の象徴ではなかったかと思います。格差の解消は、南ア政府にとっても第一優先事項として取り組むべき課題でしたし、国際社会もそれを支援していくことで合意していました。

他方、日本を含む諸外国の外交官、国際機関職員、援助関係者、民間企業駐在員等は南アの格差是正を直接・間接的に支援するため前線に派遣されていたわけですが、これら外国人が日常の不安なく仕事に専念するためには、生活環境などのインフラが整い安全対策に配慮が行き届いた場所に住居を求めるのは当然の帰結ですので、黒人が多く居住する地区は治安面を考えても全くの論外です。結局、居住地として行きつくところは白人層が多い高級住宅街ということになっていたわけです。

プールのある家

ロンドンからプレトリアに転勤したのは 10 月。季節は南半球の春で、ジャカラランダの花が咲き乱れている頃でした。プレトリアで外国人が住める住居は、独立家屋に限られます。集合住宅は、貧困層が多く居住しており治安も悪いことから対象外でした。住居探しにおいては、不動産会社が仲介しますが彼らの役割はそれだけ、英国の慣習とは違って家の細かいことはオーナーとの直接交渉ですので、快適な生活を送れるかどうかはオーナー次第ということになります。

プレトリアでも引っ越しを経験していますが、1 軒目は延べ床面積が 250 m²、2 軒目が 380 m²で、とにかく南アの住居のスケールはそれ以前、それ以後の在勤地住居と比較しても桁違いでした。

1 軒目の住居は以前第 35 回のコラムでも書いたように、10 軒ほどの独立家屋が建つ

エリアを取り囲むように堅牢な塀が巡らされ、塀のゲートにはセキュリティ・ガードが配置されたコンプレックス住居でした。住居のオーナーは、レストラン経営と兼業で何件かの不動産を運営していたアフリカーナ（ボア人とも呼称するオランダ系南ア人）。性格が細かい上に少し高圧的なオーナーで契約交渉は面倒でしたが、何とか2年契約にこぎつけました。2階建の住居で、玄関脇に2台分あるオープンのパーキングと住み込みメイド用の部屋というのが入り口の外観。室内の間取りは、玄関を入れて直ぐ左側にキッチン、正面から右側が天井吹き抜けのタイル張りリビングダイニング、独立したサロン、キッチンと壁を隔てた廊下の奥にバスルーム付きのメインベッドルームと子供部屋にしていたベッドルーム、2階にもベッドルーム2室とバスルームという構成でした。もっとも、日常2階に上がることはほとんどなく、1室を物置に、もう1室は空き部屋という状態でしたが… リビングから中庭に出ると4m×8m程のプールと屋根付きのテラスでした。セキュリティ対策としては、1階のベッドルームに繋がる廊下にスチール製の蛇腹の格子戸（バーグラバー）を取り付けた上で警報装置も設置してメインベッドルームと子供部屋をガード、就寝時にはバーグラバーの施錠と警報装置を作動させることが日課でした。

前回のコラムで、イスラエルの住居が夏向きにできていることに触れましたが、南緯25度ほどに位置するプレトリアの住宅も同様で、窓などの開口部を大きくとっているのが特徴です。標高が1,400mと高地でしたので、朝晩は涼しく快適に過ごすことができましたが、夏場の日中はかなり気温が上がる気候でしたので、夏向きに建てられているのには合理性があったと思います。その分、冬場はかなり寒い思いをしましたが…

住居は家具なしで、ソファセット、ダイニングセット、ベッド等々、家の広さに応じた家具の調達にはそれなりに出費が嵩みました。メイドが犯人の手引きをした盗難事件もありましたが、メイドを代えてからは平穏な生活で、中庭のプールなどは子供の格好の遊び場でした。ペットを飼うことにしたのもこの家でのことです。通常、南アでは番犬代わりに大型犬を飼うのが一般的ですが、筆者の場合、子供が小さかったこともあって小型犬にしました。知人に紹介してもらった郊外のブリーダーを訪ね、生後2か月の黒毛のミニチュアダックスフンドを900ランド（約1万円）で購入。その帰路、路上で黒人が販売していた小型の犬小屋も同時に購入。犬小屋は1,000ランドでしたので、犬の値段よりも高いのが不思議でした。ペットを飼っていたのは、後にも先にも南アに在勤していた時だけでしたが、ペットとの触れ合いは子供の情操を育むのに一役買っていたと思っています。

2 軒目は大豪邸？

1軒目の住宅で落ち着いた生活を過ごしていたところ、入居から1年半頃に突然オーナーから退去してくれとの通告。理由は、離婚により今まで住んでいた家を追い出され

たので自分の持ち家に戻ることになった、という説得力のない身勝手なものでした。当方は、契約期間内であることを盾に頑張りましたが全く埒があきません。仕事も多忙でしたので、家の契約ばかりにエネルギーを割くわけにもいかず、結局はオーナーが1か月の家賃に相当する額をペナルティとして当方に支払うという条件で妥協し退去するに至りました。

2軒目の家は、新聞のClassified欄に掲載されていた不動産会社の仲介で1軒目の家から至近距離に見つけた物件。市内のプレトリア・カントリークラブを見下ろす丘陵の斜面に建ち、鉄筋コンクリート造りで外壁を赤レンガで覆われた独立家屋でした。これが思いのほかの掘り出し物で、立地、外観、広さ、間取りのいずれも申し分なく、最初の内覧で入居を即決。オーナーは、この物件を購入したばかりというアフリカーナで身長は2メートルもある大男でしたが、1軒目のオーナーとは真逆の親切心の塊のような人で、その人柄も決め手になりました。

家の場所は、突き当たりが行き止まりになっている袋小路(cul de sac)の一角にあって人通りはほとんどなく、部外者が侵入するとかなり目立つ場所でセキュリティ上も守り易い立地。周囲には、同様の外観の独立家屋が15軒ほど並んでいました。表通りに面した玄関は、ドアの内側に鉄格子ドアが設置された2重構造で、玄関右には木製の堅牢なシャッターのある車2台分のガレージ、左側には住み込みメイド用の独立した小部屋という外観でした。屋内には玄関とガレージの両方から入室できる構造。斜面に建てられていた構造上、玄関を入ると8畳ほどの小部屋が1室(物置部屋として使用)あるだけで、居住スペースは階下に大きく広がっていました。U字形の階段を下りてすぐ左側に来客用トイレ、その先から奥の裏庭に向かって20メートルほどの直線の廊下がベッドルームのエリアまで伸びており、廊下を挟んで手前右側(1階のガレージと小部屋の真下の位置)に30畳ほどのラウンジ、左側には大邸宅にしては小ぶりのキッチンとランドリースペース、キッチンの先が20畳程度のリビングダイニングでした。ベッドルームに続く廊下の途中には、防犯用の鉄格子ドアが設置され、その奥の廊下左側に20畳ほどのバスルームが付随したメインベッドルーム、右側に約15畳(子供2人の寝室)と10畳のベッドルームとバスルームという間取りでした。子供部屋とラウンジ及び廊下に囲まれた一角にパティオが配置されていました。丘陵地の斜面に建てられていたため、敷地の制約もあって廊下の先にあった裏庭は狭くプールもありませんでしたが、眼下に広がるプレトリア・カントリークラブの景色はいつ見ても飽きませんでした。この広さがあれば来客が宿泊しても困ることはないなと思っていたのですが、南アの治安については悪評が高かったからでしょうか。日本からの来客は全くありませんでした。

各部屋を畳の数で表現したのは、いかに家が広いかをイメージしやすくするためですが、最初の内覧時に住居の延べ床面積は上述のとおり380㎡と聞かされていましたので、各部屋の畳数はあながち間違っていないと思います。とにかく、その広さに圧倒されました。キッチン以外の床は全面に絨毯が敷き詰められ、廊下を挟んで左右のリビ

ングとラウンジの天井は3m以上、廊下も柱があるだけで壁の仕切りがないオープンな大空間で、手持ちの家具類だけではスペースが埋まりませんでした。特にラウンジは、8畳間が4つはすっぽりと入ってしまう広さで、レンタルのアップライトピアノを配置しましたが、片隅にちょこんと置かれているだけでピアノとしての存在感が全くありませんでした。余談ですが、ラウンジには高さが天井まである幅3mの豪華な巨大食器棚が設置されていたのには度肝を抜かれましたが、さすがに体格のいい南ア人でも棚の上部は脚立がなければ届かない大きさで、こんな棚を設置した南ア人のセンスには首を捻りました。とにかく、スカスカだったこのラウンジの空間を埋めるために、後日中古のソファセットを2セットも購入しましたが、それでも部屋の中は十分すぎるスペースがありました。

プレトリア住居事情の豆知識

南アの治安が劣悪なことはこれまで何度も述べてきましたが、住居が広ければそれだけ賊の侵入ルートは増えることとなりますので、外部からの侵入を如何にして防ぐかが最重要の課題です。プレトリアでは、外国人が居住する住宅のほとんどはコンクリート製の塀に囲まれた独立家屋で、塀の上部には侵入防止用の有刺鉄線、忍び返し、高圧電流の通った電線が設置されており、住居内部にはリビングルームと寝室エリアを隔てた廊下にはバーグラバーと呼ばれる侵入防止用の鉄格子が設置されるとともに、警備会社に直結したアラームシステム（警報装置）が設置されているのがスタンダードとなっています。日本大使館でも、館員住居にはバーグラバーとアラームシステムが設置されていなければ賃貸契約が締結できないといった厳しい基準が設けられており、オーナーが警備設備の設置費用を負担できない場合には本人負担で設置することになりますが、その場合には大使館から半額以上の補助がありました。いずれにしても、館員や館員家族に万が一のことがあれば大問題となりますので、警備に関する厳しい基準を設けるのは当然のことであろうと思います。

夏向きにできている南アの住居、2軒目の家では夏場の暑さ対策としてエアコンが完備されていたのは助かりましたが、その一方で冬場の寒さ対策が全くできていないのが問題点でした。南緯25度のプレトリアは、北半球で言えば台湾北部に相当しますが、海拔1,400メートルを超える高地にあって、冬場の7月から8月ごろの気温は日中20℃前後まで上昇しますが、早朝は0℃～2、3℃前後にまで下がり、寒暖の差がかなりあります。広い居室に暖房設備が全くないのには、いささか閉口しました。市内のホームセンターで暖房器具を探し回りましたが、日本のような気の利いた石油ストーブやファンヒーターなどはなく、唯一手に入ったのがプロパンガス燃料とするガスストーブでした。燃料のプロパンガスは、市内のガソリンスタンドでボンベを調達し車に乗せて家に持ち帰ります。ボンベをそのまま自家用車に乗せて帰るなど、日本であれば危険物取り

扱いの免許を所持していなければご法度の危険行為ですが、南アでは当たり前のように市民がガソリンスタンドでポンベを購入していました。これもお国柄でしょうか。しかし、たかがガスストーブ1基だけではとてもではありませんが広い室内を暖めることは無理です。ということで、冬場の早朝は広い室内にポツンと置かれたストーブの周りに家族が集まって暖をとっていました。

南アの日常、特に週末の楽しみといえば、何ととっても大勢の人が誰かの家に集まって Braai をすることにつきます。Braai とはいわゆる BBQ のこと、牛肉、豚肉、鶏肉など肉類が豊富で安価な南アならではの食文化で、アフリカーナが持ち込んだ習慣といわれています。何しろ、彼らは朝食にステーキを食べるほどの肉好きですから。週末の昼下がりに、あちこちの家々の庭やテラスから Braai の煙が立ち上ります。我が家でも、時々大使館員や現地 JICA 事務所員、在留邦人など 6~7 家族、総勢 17、8 人が集まって Braai を楽しんでいました。逆に、誰かの家に招かれることもしばしばありましたが、要は誰の家であれ広い住居ですから、そこに皆が集まって Braai を楽しもうというわけです。我が家の場合、サロンに面したパティオが Braai の場所になっていました。パティオにグリルとテーブルセットを並べ、それぞれが持ち寄った大量の肉やソーセージ、野菜などを塩、胡椒、ハーブなどで味をつけて焼くだけの豪快かつシンプルな料理ですが、これがビールやワインとの相性抜群でした。Braai は、昼から夕刻まで延々 5~6 時間は続きますが、子供たちも走り回る場所があって全く飽きません。10 数人の来客は各々サロンやリビングなど居室の好きな場所に陣取って Braai とワインを楽しみながら会話に花を咲かせていましたが、このようなことができるのも広い家があるからこそ。劣悪な治安、多忙な大使館業務など、ともすればギスギスとなりがちな南アでの日々も、Braai という週末の楽しみが潤いをもたらしてくれました。

今回は、欧州大陸のギリシャとドイツの住居についてお話しします。

つづく

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977 年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国 (英国) 大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の 9 公館で計 29 年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に 2019 年 3 月退官。同年 5 月より現職。